

【 6 】

氏 名	門 脇 禎 二 かど わき てい じ
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 42 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	「大化改新」論 —その前史の研究—

論文調査委員 (主査) 教授 赤松俊秀 教授 小葉田 淳 教授 佐伯 富

論 文 内 容 の 要 旨

この論文の構成は3部から成り、第一章 舒明天皇即位時紛争事件・第二章 上宮王家滅亡事件・第三章 蘇我本宗家滅亡事件に別けて、7世紀中葉に行なわれた大化改新の前史をいづる三大事件について、関係史料の再検討から論を始め独自の見解を示している。

まず舒明天皇即位時の紛争事件であるが、推古天皇崩御後、遺詔の解釈をめぐる朝廷内が田村皇子擁立と山背大兄王擁立とに分かれ、蘇我蝦夷のおじ、山背大兄王を推した境部摩理勢が殺されたのちに田村皇子の即位が実現した。著者は独自の史料批判を行なって推古天皇の真意を明らかにすることに努め、田村皇子はタフレまたはタフリ皇子と訓ずべきで、隋書の太子和歌弥多弗利に比定し得る、と考察する。

上宮王家滅亡事件は、蘇我本宗家滅亡の2年前に山背大兄王一族が蘇我入鹿の攻撃によって滅ぼされたことをさす。著者は関係史料の検討を通じて、大兄皇子の制度的考察を進め、皇后もしくは正妃所生の第一男で皇太子の最有力な候補者という従来の学説を徹底し、大兄皇子は同時に複数として存在しなかった、との新見解を立てる。著者によると、この事件は入鹿が大兄皇子である山背皇子を廃して、舒明天皇皇子古人を大兄皇子に擁立した運動であった。蘇我氏は以前から内粉的傾向が顕著であったが、入鹿が大臣に就任直後に他の有力氏族の廷臣らと共同して遂行したこの事件によって、氏としての分裂はいよいよ深刻となった。

蘇我本宗家滅亡事件は、中大兄皇子・中臣鎌足らの謀議による蘇我入鹿・蝦夷殺害など一連の事件をいう。著者はまず入鹿・蝦夷の名が古代貴族の中華思想や、汚れをはらう易名思想によって作為された、とし、実名は毛人・鞍作であったことを史料考証によって明らかにする。著者はまた、当時の朝廷が入鹿大臣のもと、開明的立場をとる一派と、長老阿部内磨呂・蘇我倉山田石川磨呂らを主とする一派に別れていたこと、葛城皇子すなわちのちの中大兄皇子は事件当時入鹿・蝦夷打倒を主導する地位になかったこと、中臣鎌足らは中流官人として本来開明派に属していたことを明らかにして、この事件の真相を追究する。

論文審査の結果の要旨

大化改新は、律令制社会発足の出発点となった政変として、早くから注目されているが、関係史料が乏しく、日本書紀・藤原家伝など後世にある目的を持って編集されたものを除くと、信頼に値する原史料は絶無といってもよい。研究の難点がそれに基因する以上、研究の進歩は、現存の史料を従来以上に精査し、信頼に値するものをそのなかから見いだすことによって初めて期待される。著者は多年にわたる研究精進によって、関係史料検討において従来見られなかった独自の解釈を打ち立て、それを基礎に大化改新の前史をいろどる三大事件について新しい見解を明らかにした。その意義は高く評価されるべきである。しかしなにもふんにも史料が乏しい時代だけに、論証が十分でないと思われることも若干伺われる。また大化改新論としては、前史の考察のみではもちろん完全ではなく、問題の多い改新詔を始めとして、律令制確立までの政治過程および社会制度改変のあとまで究明すべきものと思われる。この点については著者の今後の精進を期待する。

以上述べた主旨により、この論文は文学博士の学位を受ける価値を有するものと認める。